

夏目漱石『吾輩は猫である』の表現とレトリック

西 田 直 敏

一 成立と特色

『吾輩は猫である』は、『ホトトギス』に明治三八年（一九〇五）一月から明治三九年八月まで十一回にわたって掲載された。

よく知られているように高浜虚子の勧めで、英文学者、東京帝大講師、夏目漱石が正岡子規門下だった人々の文章会「山会」に出した創作が好評で「ホトトギス」に掲載されたのが「吾輩は猫である」の第一回であった。「山会」は、子規が文章には「落語の山」のような「山」がなければならぬという主張から始められたもので「滑稽なところに重きを置く」傾向があったと虚子は回顧している（「山会の朗読」『俳句の五十年』）。

「吾輩は猫である。名前はまだない。」と語り出す、棄てられ子猫が語る人間社会、猫社会の観察、体験談が写生文の筆致で滑稽に描かれる。漱石自身「滑稽文」と称している（八）。

最初、漱石は、「山会」に出した文章の題名を決めていず、「猫伝」としようかと言っていたが、虚子が冒頭の一句をそのまま「吾輩は猫である」と表題にすることを提案し、この画期的な題名が決まった。漱石は単行本中編自序（一九〇六年）において「猫」と略称して以後「猫」を用いている。本論文でも、以下、「猫」と略称する。

『猫』の研究は数多くなされているが、その表現、レトリックについて精細な研究は見当たらずである。

漱石は『猫』連載中に、「倫敦塔」「カーライル博物館」（明治三八年一月）、「幻影の楯」（四月）、「琴のそら音」（五月）、「一夜」（九月）、「薤露行」（十一月）、「趣味の遺伝」（明治三九年一月）、「坊っちゃん」（四月）、「草枕」（九月）を執筆し、発表し続けた。これによって作家としての地位が確立し、明治四〇年（一九〇七）四月に、東京帝國大学講師、第一高等学校教授の教職を辞して、朝日新聞社に入社するのである。

『猫』は語り手の猫の視点から「人間になりまして」飼われている中学校教師珍野苦沙弥先生の家庭を中心に美学者迷亭、秀才理学士寒月ら太平の逸民たちの饒舌の織りなす滑稽と諷刺を語っていく写生文である。漱石自身は作中で「写生文を鼓吹する吾輩」（五）と言い、「主人が滑稽文の材料になるのも」（八）と述べている。

本稿では、『猫』の言語的表現とそのレトリックについて解析し、その特色を明らかにしていくが、まず、漱石の笑いを醸し出す要素となっている独自の創出した複合語をとりあげ、次に、漱石の饒舌を感じさせる要素となっている列挙法というべき表現法について述べる。最後に、漱石のユーモア、また独自性をよく示すものとして、比喩をとりあげる。以下、引用は『漱石全集』（一九九六年 岩波書店）第一巻「底本は雑誌『ホトトギス』」による。出所は（一）第一回、（五）第五回のように示す。

二 漱石創案の複合語

『猫』を読んでいくと、笑いを醸し出す要素として、漱石が創り出した複合語が

あちこちにあることに気づく。従来、指摘されることのなかったもので、順次、挙げていく。

例の神経胃弱性の主人 (一)

神経衰弱気味で胃弱の主人の形容。

後架先生 (一)

「後架」(トイレ)で、謡をうたう教師。

近所でつけた渾名。

同盟敬遠主義の的になって居る奴だ。 (一)

乱暴猫で教育のない車屋の黒とは近所の猫は誰も申し合わせたように交際しない。

大に滑稽的美徳を挑発するのは面白い。 (一)

冗談を真に受ける人が多いのは滑稽であり、愉快である。

牡蠣的主人 (二)

牡蠣的生涯 (二)

「どんな義務があるのですか」と牡蠣先生は掛念の体に見える。 (二)

「彼は性の悪い牡蠣の如く書斎に吸ひ付いて、嘗て外界に向つて口を開いた事がない。」(一)、机にへばりついている教師、学者の形容に牡蠣を用いたのは、

日本語的ではなく英語的である。漱石の教養である。

漱石は『哲学雑誌』第七回第六十八号(明治三十五年十月)の「雑録」欄に無署名で「文壇に於ける平等主義の代表者」「ウォルト、ホイットマン」「Walt Whitman」の詩について「を寄せている。」(全集)第十三巻、漱石二五歳、その中に、次の一節がある。

空言は実行に若かず “How beggarly appear arguments before a defiant deed!”
家庭は大道に若かず 一家に恋々たる者は田螺のわび住居を悦ぶが如く蝸牛の
宅を負ふてのたり／＼たるが如く牡蠣の口堅く鎖して生涯蒼海を知らざるが
如し。

『猫』の第三回に於いて、主人は「牡蠣先生」と呼ばれ、「牡蠣的主人」「牡蠣的生涯」と形容されるが、第三回以後、最終回まで「牡蠣的」と形容されることはな

い。第三回から金田家の鼻子夫人や落雲館の中学生など外界との交渉が前面に出てくるために「牡蠣」にとどまっておれなくなったためであろう。また、第三回から主人の名が「苦沙弥」と定まったことも「牡蠣先生」が消えた理由かと考えられる。

三毛子は此近辺で有名な美貌家である。 (二)

吹い子の向ふ面 (二)

正月野郎 (二)

乱暴猫車屋の黒の悪態のことば。江戸っ子ののしり語。「吹い子の向ふ面」は家計が青息吐息の状態をのしる。「正月野郎」はおめでたい奴。

首縊りの力学と云ふ脱俗超凡な演題 (三)

寒月君の理学協会での演説の題についての評。俗世間を離れた、浮世離れた。

縄暖簾の先へ提灯玉を釣した様な景色 (三)

空也餅引掛所 (三)

寒月君の欠けた前歯。空也餅がそこにくっつく。

永く前歯欠成を名乗る訳でもないでせう (三)

椎茸を食べて前歯二本を折った寒月の形容。茶化した名乗。

猿智慧から割り出した術数と、天来の滑稽趣味と混同されちや、コメディーの神様も活眼の士なきを嘆ぜざるを得ざる訳に立ち至りますからな。 (三)

迷亭が自分の法螺は天来の滑稽趣味から出るものでコメディーになっていると語るところ。

極楽主義を發明したのは明治の紳士で、極楽主義を実行するものは鈴木藤十郎君で、今此極楽主義で困却しつゝ、あるのも亦鈴木藤十郎君である (四)

「苦勞と心配と争論とがなくて事件が進捗すれば人生の目的は極楽流に達せられるのである。」という主義が「極楽主義」である。

三角主義の張本金田君の令嬢阿部川の富子 (五)

「義理をかく、人情をかく、恥をかく」の「三角主義」が金を作るコツだという実業家金田君の令嬢富子が阿部川餅をむやみに食べること。

泥棒陰士 (五)

「陰士」は「隠士」のもじり

「子供のちゃんく」を二枚、主人のめり安の股引の中へ押し込むと、股のあたりが丸く腫れて青大将が蛙を飲んだ様な——或は青大将の臨月と云ふ方がよく形容し得るかも知れん。兎に角変な恰好になった。(五)

「オタンチン、パレオロガスと云ふんです。オタンチンと云ふのが禿と云ふ字で、パレオロガスが頭なんでせう」(五)

「おたんちん」は江戸の俗語で「間抜け」、「パレオロガス」は東ローマ帝国皇帝コンスタンチン・パレオロガス。

団栗博士の夢 (四)

寒月君は「日夜団栗のスタビリチーを研究」している。博士になれるかも知れない。

鼻名を千載に垂れる (四)

「美名」と「鼻名」のかけことば。

大方鼻恋位な所だぜ (四)

「大した恋ぢやなからう」と言っているもので「鼻先だけの恋」の意であろう。

混成猫旅団 (五)

日露戦争中の兵団の編成を模した語。

鼠は旅順砲の中で盛に舞踏会を催ふして居る。

「旅順砲」は「旅順湾」のもじり。茶碗の中で鼠が暴れている。あまいとからいと参照する所なんか「七味唐辛子調」で面白い。(六)

「七味調」は俳句調、「七味唐辛子」をかけている。

懸賞的興奮剤 (七)

鯉節競争 (七)

蟪蛄狩り (七)

蟬取り運動 (七)

「鯉節競争」以下は猫の運動である。

一体どう云ふ心理的状态の生理的器械に及ばず影響だらう。(七)

蟬が飛び立つ時に小便をすること。

松皮摩擦法 (七)

猫が蚤にたかられ、松の皮に体をこすりつけてそのかゆさをまぎらす方法。

裸体動物 (七)

裸体の人間。服を着て服装の動物となった人間が全裸の人間に出会えば、人間とは認めず獣と思う。

吾輩は淡泊を愛する茶人的猫である。(七)

裸体信者 (七)

ヌーデリスト。

礼服なるものは一種の頓珍漢的作用によって、馬鹿と馬鹿の相談から成立したものだ。(七)

猿股期、羽織期、の後に来るのが袴期である。(七)

生意氣書生 (七)

主人の両顎の離合開闔の具合を熱心に研究して居る。(七)

威嚇性大音声 (八)

野蛮的行動 (八)

多角性のおさん、お多角 (九)

角ばった顔のおさん。「お多福」をもじって「お多角」。下女の御三の顔について「丁度あの河豚提灯の様にふくれて居る。あまりふくれ方が残酷なので眼は両方共紛失して居る。(中略)御三とくると、元来の骨格が多角性であつて、其骨格通りにふくれ上がるのだから、丸で水気になやんで居る六角時計の様なものだ」(九)と評している。

このおさんは声盲なのだらう (十)

空腹の吾輩は朝食を催促していろいろ泣きたてているが、おさんに全く反応がないので、猫の声だけ聞こえない「声盲」なのだろうと思う。

(主人は) 逆上の敏腕を大に振って居る積もりである。(八)

こんな幸福を豚的幸福と名づけるのださうだ。(九)

生まれ付いての野猪の本領が直ちに全面を暴露される。(十)

生まれつき持っているいのししの本質が直ちに全面的にあらわれる。

云はゞ胡魔化し性表情で (十)

交際のために涙を流したり、気の毒がる顔を作ってみせたりすること。

君のはエルテル丈あつて、ワイオリン癪だ。(十)

いつの間に秘密結婚をやつたのかね。(十)

あの表情は超絶的曲線で到底普通のファンクションではあらはせないです。(十)

transcendental curve の訳語。「超越曲線」と訳されている。

主人は娘の教育に関しては絶対的放任主義を執る積もりと見える。(十)

今に三人が海老茶式部か鼠式部になつて、三人とも申し合わせた様に情夫をこ

しらへて出奔しても (十)

「海老茶式部」は海老茶色の袴をはくことから、女学生。「鼠式部」はそのもじり。

まるで菟弱閻魔ね (十)

一夫多妻主義 (十)

軽便信用だね (十)

以上に挙げた漱石が創案したかと思われる語結合(連語)、複合語の類は、滑稽文を支えるユーモアのセンスとサタイア(風刺)を感じさせる。

造語法としては、

語結合方式——生意気書生、空也餅引掛所、泥棒陰士、混成猫旅団、菟弱閻魔、

秘密結婚、松皮摩擦法、裸体動物、正月野郎、団栗博士、猿股期、蟪蛄狩り、蟬取り運動、軽便信用

主義——同盟敬遠主義、極楽主義、三角主義、絶対的放任主義、一夫多妻

主義

先生——後架先生、牡蠣先生

式部——鼠式部

性——神経胃弱性の主人、胡魔化し性表情、多角性のおさん、威嚇性大音声

的——滑稽的美感、牡蠣の主人、懸賞の興奮剤、生理的器械、野蕃的行

動、逆上の敏腕、豚的幸福、野猪の本領、超絶的曲線、絶対的放任主義、茶人の猫

これらを眺めてみると、現代作家の井上ひさしや椎名誠らの作品に見られるユーモラスな複合語の先蹤という感じがする。

三 『猫』を彩る饒舌な表現——語句の列挙、反覆方式

『猫』の表現的特色として漱石の饒舌とも言ふべき表現がある。押さえきれない表現欲、持ちあわせている該博な知識と教養を残りなく注ぎこんだ術学的とも見える表現、それらが『猫』の写生文、滑稽文を彩っている。

センテンスとして、その構文を見ると、くどいまでに類似語、反対語などを並べることによって、修飾語の並列表現、述語の並列表現を生み出している。

A 人の許諾を経ずして吾妻橋事件杯を至る所に振り廻はす以上は、人の軒下^Bに犬を忍^Aばして、其報道を得々として逢ふ人に吹聴する以上は、車夫^C、馬丁、無頼漢、

ごろつき書生、日雇婆、産婆、妖婆、按摩、頓馬に至る迄を使用して国家有用の

材に煩を及ぼして顧みざる以上は——猫にも覚悟がある。(二)

この構文は次のようになる。リフレインのように「——以上は」がくり返される。

A——以上は

B——以上は——猫にも覚悟がある。

C——以上は

Bの犬はスパイ。

Cの単語は連想ゲーム式に配列されている。車夫、馬丁から無頼漢、ごろつき書生、そして日雇を転機に日雇婆から産婆、妖婆、按摩から頓馬と語呂合わせとなり、話の筋とは関係ない駄洒落となっている。

こうした列挙型を語句、語にわたって用い、しつこいまでにくりかえすのが『猫』の一つの表現的特色である。

運動をしろの、牛乳を飲めの、冷水をあびろの、海の中へ飛び込めの、夏になつたら山の中へ籠つて当分霞を食へのとくだらぬ注文を連発する様になつたのは、西洋から神国へ伝染した晩近の病気で、矢張りペスト、肺病、神経衰弱の一族と心得てい、位だ。(七)

「運動をしろの」以下「命令形＋の」の形式を連ねている。

吾輩は猫だけれど、エピクテタスを読んで机の上へ叩きつける位な学者の家に奇遇する猫で、世間一般の痴猫、愚猫とは少しく撰を殊にして居る。(三)

「痴猫、愚猫」は同義語の重ね。

暮の額には夜行の明珠があると云ふが、吾輩の尻尾には神祇・釈教・恋・無常は無論の事満天下の人間を馬鹿にする一家相伝の妙薬が詰め込んである。(三)

「神祇・釈教・恋・無常」は神・仏・恋・死で人生万般。

来ると自分を恋つて居る女が有りさうな、無ささうな、世の中が面白さうな、語らなさうな、凄いな、艶つぽいな様な文句許り並べては帰る。(二)

熱い〜と云ふ声が吾輩の耳を貫いて左右へ抜ける様に頭の中で乱れ合ふ。其声には黄なもの、青いもの、赤いもの、黒いものもあるが互に疊なりか、つて一種名状すべからざる音響を浴場内に漲らす。(七)

色の羅列であつて「黄色い声」という形容はあるが「青い声」「赤い声」「黒い声」はない。漱石の色合わせの洒落である。

(猫の社会では) 目付でも、鼻付でも、毛並でも、足並でも、みんな違ふ。髯の

張り具合から耳の立ち並び、尻尾の垂れ加減に至る迄同じものは一つもない。器量、不器量、好き嫌ひ、粹無粹の数を悉くして千差万別と云つても差支へない位である。(三)

でも、——でも、——でも の同語並列型。目付、鼻付、毛並、足並は語末語の反覆型。

——具合、——並び、——加減 の同義語重ね型。

器量不器量など反対語セット型。

其うちに総身の毛穴が急にあって、焼酎を吹きかけた毛脛の様に、勇氣、胆力、分別、沈着杯と号する御客様がすう〜と蒸発して行く。心臓が肋骨の下でス

テ、コを踊り出す。両足が紙鳶のうなりの様に震動をはじめ。(二)

勇氣・胆力・分別・沈着は列挙法

天璋院様の御祐筆の妹の御嫁に行った先きの御つかさんの甥の娘。(二)

「の」の連結、修飾されているが、列挙されている関係が明確にはわからない。『猫』で有名な系図書きである。「詰る所天璋院様の何になるんですか」を聞かざるをえない類のもの。

〔類語の連想的列挙〕

連想によつて類語を列挙したような表現

暮、戦死、老衰、無常迅速 杯と云ふ奴が頭の中をぐる〜駆け廻る。(三)

敢て同族を軽蔑する次第ではない。只性情の近き所向つて一身の安きを置くのは勢の然らしむる所で、之を変心とか、輕薄とか、裏切りとか評せられては些と迷惑する。(三)

吹き払ひ、吹き通し、抜うら、通行御免、天下晴れての空地である。(八)

主人の家にあらゆる堀、垣、乃至は乱杭、逆茂木の類は全く不要である。(八)

「乱杭、逆茂木」は昔、城の防備として敵の侵入に備えたもの。大袈裟な表現がユーモラスである。

(迷亭は) 心配、遠慮、気兼、苦勞、を生まれる時どこかへ振り落した男である。(三)

だから探偵という奴はスリ、泥棒、強盗の一族で到底人の風上に置けるものではない。(七)

所謂洗場は鼻の先、眼の下、顔の前にぶらついて居る。(七)

こんな、しつこい、毒悪な、ねちねちした、執念深い奴は大嫌いだ。(七)

〔句末語句の反覆〕

——如く、——如く、——如く型

猫の足はあれども無きが如し、どこを歩いてても不器用な音のした試しがない。空を踏むが如く、雲を行く如く、水中に聲を打つが如く、洞裏に瑟を鼓するが如く

く、醍醐の妙味を嘗めて言詮の外に冷暖を自知するが如し。(三)

形体以外の活動を見る能はざる者に向つて己霊の光輝を見よと強ゆるは、坊主に髪を結えと逼るが如く、鮪に演説をして見ろと云ふが如く、電鉄に脱線を要求するが如く、主人に辞職を勧告する如く、三平に金の事を考へるなど云ふがごときものである。(五)

蒲鉾の種が山芋である如く、観音の像が一寸八分の朽木である如く、鴨南蛮の材料が烏である如く、下宿屋の牛鍋が馬肉である如く、インスピレーションも実は逆上である。(六)

〔語末字の反覆〕

「——然、——然、——然」型

其由来を案ずると何も無理矢理に、出鱈目に、偶然に漫然に持ち上がった事実では決してない。(七)

今迄静まり返つて居たやからが紛然、雜然、糅然として恰もコンノート殿下歡迎の当時に於ける都人士狂乱の態度を以て脳裏をかけ廻る。(八)

倫理の講義をきいてにや／＼して居た主人は奮然として立ち上がった。猛然として駆け出した。驚然として敵の一人を生捕つた。(九)

「奮然」「猛然」「驚然」と語呂合わせをしている。

「——妙なる、——妙なる、——妙なる」型

(雪江さんは) 主人が帰つてきて油壺を抛り出すや否や忽ち死龍に蒸気唧筒を注ぎかけたる如く、勃然として其深奥にして窺知すべからざる、巧妙なる、美妙なる、奇妙なる、靈妙なる麗質を、惜気もなく発揚し了つた。(十)

「麗質」の修飾語として「——妙なる」という構造の語を四つ重ねている。

「——み、——み、——み」型

ひもじい時の神頼み、貧のぬすみに恋のふみと云ふ位だから(十一)

「神頼み」「貧のぬすみ」「恋のふみ」と韻を踏んでいる。「ひもじい時の神頼

み」は「苦しい時の神頼み」のもじり。

〔語末の語構成要素(語形式)の反覆〕

語を形成している語構成要素が語の形として認識されるものの反覆。

耳と尻尾は餅と何等の関係もない。要するに振り損の、立て損の、寝かし損であると気が付いたからやめた。(十二)

寒月でも、水月でも知らないんだよ——大嫌ひだわ(十三)

桂月だつて梅月だつて、苦しい思いをして酒を飲めなんて余計な事ですわね(十四)

娘は——(中略)——まづ着倒れか、食ひ倒れ、若く吞んだくれの類だらう。よもや恋ひ倒れにはなるまい。ことによると卒塔婆小町の様に行き倒れになるかも知れない(十五)

〔「猫」の尻取り文〕

漱石の文といえ、尻取り文が有名である。「尻取り文」とは、言語学者で文体論学者であつた小林英夫の命名したものであるが『文体論の建設』一九四三年、小林のあげた典型的なものは、「草枕」の冒頭にある、次の文である。

人の世を作つたものは神でもなければ鬼でもない。矢張り向ふ三軒両隣にちら／＼する唯の人である。唯の人が作つた人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国へ行く許りだ。人でなしの国は人の世よりも猶住みにくいからう。

同様の文は、既に『猫』にもある。

——是が主人の髪を長くする理由で、髪を長くするのが、彼の髪をかける原因で、其原因が鏡を見る訳で、其鏡が風呂場にある所以で、而して其鏡が一つしかないと云ふ事実である。

『猫』九

世に住めば事を知る。事を知るの嬉しいが日に日に危険が多くて、日に日に油断がなくなる。狡猾になるのも卑劣になるのも表裏二枚合せの護身服を着けるのも皆事を知るの結果であつて、事を知るの年を取るの罪である。老人に碌なものが居ないのは此理だ(十六)

先達でムッセの脚本を読んだら其うちの人物が羅馬の詩人を引用してこんな事を云つて居た。——羽より軽い者は塵である。塵より軽い者は風である。風より軽い者は女である。女より軽い者は無である。——よく穿つて居るだらう。

『猫』六

『漱石全集第十九巻』の「断片二五」に、この Musset の *Barberine* の英訳本からの抜き書きが残されている。

I have not a doubt you are right ; but you know what the philosophers say, with the Latin poets. What lighter than a feather?—dust. Lighter than dust?—wind. Lighter than wind?—woman. Lighter than woman?—nothing.

四 『猫』における漱石独自の比喩

『猫』は、執筆時点に於て、漱石の持っていた知識、教養を生かして作中に注ぎこんだものであった。中には、「御前世界で一番長い字を知っているか」*Anchaime-lesionophricherata* (ギリシア語。古代のアリストファネスの喜劇「蜂」にある言葉で「古臭く甘ったるいプリュニコスのシドンの歌のような」という意味。『漱石全集第一巻』注解)「長く書くと六寸三分位にかける」というのがある。また、その前に、細君に猫の頭を叩かせて、「今鳴いた、にや、あ」と云ふ声は感投詞か、副詞か」と問いかける。主人は今度は大声で「おい」と呼びかけ、「はい」と細君が返事をする、「そのはいは感投詞か副詞か、どつちだ」と聞く。「そんな馬鹿げたこととはどうでもいいぢやありませんか」と細君に言われると、「いいものか。是が現に国語家の頭脳を支配して居る大問題だ」「あらまあ、猫の鳴き声がですか。いやな事ねえ。だつて、猫の鳴き声は日本語ぢやないぢやありませんか」「夫だからさ。それが六づかしい問題なんだよ。比較研究と云ふんだ」「さう」と細君は利口だから、こんな馬鹿な問題には関係しない。(七) と切つて捨てる。

こうした言語に関する問題などは、漱石の銜学趣味とでもいうべきもので、蛇足のようなものである。

さて、比喩は常套的な表現も多いが、作家の個性を発揮できる表現法である。

『猫』の比喩を見ると、まず直喩から見よう。漱石らしいものがすぐ挙げられる。

彼は性の悪い牡蠣の如く、書齋に吸い付居て、嘗て外界に向つて口を開いた事がない。(二)

牡蠣を沈黙の象徴に用いるのは英語的である。

顔を洗ふたんに鵝鳥が絞め殺される様な声を出す人で御座んす(二)

鵝鳥は英語では、とんまの代名詞に用いられる。

総身の活気が一度にストライキを起した様に元気がにはかに減入って仕舞ひまして(二)

西洋洗濯屋のシャツのように女がぶら下つたと見れば好いんだろう(三)

テレマカスがペネロピーの十二人の侍女を絞殺した方法について寒月君が演説をしたのに対する迷亭の相槌。

十九世紀で売れ残つて、二十世紀で店曝しに逢ふと云ふ相だ(三)

「相」は人相。

かの御母堂 杯はどこへ出しても恥づかしからぬ鼻——鞍馬山で展覧会があつても恐らく一等賞だらうと思はれる位な鼻を所有して入らせられます。(三)

『御母堂』は金田夫人鼻子。「鞍馬山で展覧会」は、鞍馬山の天狗と鼻くらべをさせてもの意。

シーザーの鼻を鋏でちよん切つて、当家の猫の顔へ安置したらどんな者で御座いませうか。喩へにも猫の額と云ふ位な地面に英雄の鼻柱が突兀として聳えたら、碁盤の上へ奈良の大仏を据へ付けた様なもので、少しく比例を失するの極、其美的価値を落す事だらうと思ひます。(三)

これら鼻の比喩は笑いを醸し出すものである。

結論のない演説は、デザートのない西洋料理の様なものだ。(三)

丸い小桶が三角形即ちピラミッドの如く積み重ねてある(七)

そこでハンニバルは此大きな岩へ酔をかけて火を焚居て、柔かにして置いて、夫から鋸でこの大岩を蒲鉾の様に切つて滞りなく通行をしたさうだ(七)

彼等は水草を追ふて居を變ずる沙漠の住民の如く、桐の木を去つて松の方に進ん

で来た (八)

もし木戸から迂回して敵地を突かうとすれば、足音を聞きつけて、ばかり／＼と捉まる前に向ふ側へ下りて仕舞ふ。鹽臍^{しほはら}がひなたぼっこをして居る所へ密猟船が向つた様な者だ。 (八)

右の二つは、苦沙弥の庭に落雲館の中学生が入つて来ている様子とそれを捕まえようとする様子の形容。

丁度噴火山が破裂してラブが顔の上を流れた様なもので、親が生んでくれた顔を大なしにして仕舞った。 (九)

「ラブ」は lave で溶岩。「あばた面^づ」のこと。漱石は自身のあばた面を気にしていた。

此両者（細君と掃除）の關係は形式論理学の命題に於る名辞の如く其内容の如何にか、はらず結合せられたものであらう。 (十)

これらの比喩（直喩）は、西洋的近代的な内容、表現を持つもので、『猫』における、漱石創案の比喩と考えられる。

次に、

主人は禪坊主が大燈国師の遺誡を読む様な声を出して読み始める。 (三)

迷亭先生は例の如く空々として偶然童子の如く舞ひ込んで来た。 (三)

鉄枴仙人が軍鶏の蹴合ひを見る様な顔をして平気で閑居して居る。 (三)

鉄枴仙人（中国随代の仙人）は画題とされる。

かう云ふ好材料を得様とは全く思ひ掛けなんだ。御彼岸に御寺詣りとして偶然方丈で牡丹餅の御馳走になる様な者だ。 (四)

上を仰ぐと真黒な煤がランプの光で輝や居て、地獄を裏返しに釣るした如く、一寸吾輩の手際では上る事も、下る事も出来ん。 (五)

京都の黒谷で参詣人が蓮生坊の太刀を戴く様なかたで、苦沙弥先生しばらく持つてゐたが (九)

迷亭の古風な伯父が常に持ち歩く甲割^{かぎ}りを苦沙弥が手に取って見ていたのである。

鉄枴仙人は画題であるが、他は仏教に關係するものである。これらも漱石の創案にかかわるものにちがいない。

鼻丈は無暗に大きい。人の鼻を盗んで来て顔の真中へ据ゑ付けた様に見える。三坪程の小庭へ招魂社の石燈籠を移した時の如く、独りで幅を利かして居るが、何となく落ち付かない。 (三)

先達て日本新聞に詳しく書居てあつた大隈伯の勝手にも劣るまいと思ふ位整然とびか／＼して居る。 (三)

小共の時分喧嘩をして、餓鬼大将の爲めに頸筋を捉まへられて、うんと精一杯に土塀に圧し付けられた時の顔が四十年後の今日迄、因果をなして居りはせぬかと怪まる、位平坦な顔である。 (四)

長い比喩

実業家が主人苦沙弥先生を圧倒し様とあせる如く、西行に銀製の吾輩を進呈するが如く、西郷隆盛君の銅像に勘公が糞をひる様なものである。 (七)

吾妻鑑に將軍源頼朝が訪れてきた西行法師に銀製の猫を与えたという記事がある。西行はその像を門前の童に与えて去ったという。

鏡は己惚の醸造器である如く、同時に自慢の消毒器である。 (九)

これらも漱石の比喩（直喩）である。ユーモア、サタイアに満ちている。

比喩の中で隱喩についてみると、直喩に比して、漱石の創出したものが否か、判断のつきにくいものもあるが、一応、ここには漱石の独自性を感じさせるものを挙げた。

愈牡蠣の根性をあらはして居る (二)

主人が書齋に吸い付いて外界に口を開かない性質。

餅は魔物だな。 (二)

雑煮に食いついた猫がもてあまして発した語。

仏蘭西や英吉利へ行くと随分天明調や万葉調が食へるんだが。 (二)

「天明調」は正岡子規の俳句革新の理想、「万葉調」は子規の短歌革新の理想。

斬新な料理。

金田邸は吾輩の烟草である。 (四)

煙草は一休み。一服。

鈴木藤十郎君の名刺は臭い所へ無期徒刑に処せられるものと見える。 (四)

名刺が便所に捨てられたこと。

自分の様に出来損ひの木像は仏師屋の隅で虫が喰ふ迄白木の俣熏つて居ても遺憾はないが、是は旨く仕上がったと思ふ彫刻には一日も早く箔を塗つてやりたい。

(四)

苦沙弥先生の教え子寒月——博士を取りそうな秀才理学士——への愛情のこもった評。

金田某は何だいい紙幣に眼鼻をつけた丈の人間ぢやないか。 (四)

金田某は実業家の成功者。夫人は鼻子。苦沙弥家の近所に豪邸を構えている。

迷亭の金田某評。

奇警なる語を以て形容するならば彼は一個の活動紙幣に過ぎないのである。活動紙幣の娘ならば活動切手位な所だらう。 (四)

迷亭一流の喩を以て寒月君を評すれば彼は活動図書館である。智識を以て捏ね上げた二十八 珊の弾丸である。 (四)

大学の教師が懐剣ならリードルの教師はまあ小刀位な所だな。 (四)

主人が生徒や教師が少々ぐずぐず——言ってもこわくないと強がりを言つて、サントブーヴがパリ大学で講義をした時に不評で、いつ学生に襲われても防戦できるように短刀を用意していたという話をしたのを迷亭が茶化したもの。

主人に取つては書物は読む者ではない眠を誘ふ器械である。活版の睡眠剤である。 (五)

二十世紀のアダムである。 (七)

何しろ女は東西両国を通じて一種の装飾品である。米春にもなれん志望兵にもなれないが、開校式には欠くべからざる化粧道具である。 (七)

超人だ。ニーチェの所謂超人だ。魔中の大王だ。化物の頭梁だ。 (七)

銭湯の群衆の中から抜き出した髯の大男が破れ鐘をつくような声を出して「うめろく。熱い熱い」と叫んでいるのを見た吾輩(猫)の印象である。

落雲館に群がる敵軍は近日に至つて一種のダムダム弾を發明して、十分の休暇、若しくは放課後に至つて熾んに北側の空地に向つて砲火を浴びせかける。 (八)

落雲館の中学生が休み時間や放課後に野球、打撃を行つてボールを苦沙弥邸までとばすこと。

倫理の先生は丹波の笹山を連れて表門から落雲館へ引き上げる。 (八)

「丹波の笹山」は、丹波笹山(篠山)の山猿。ここでは暴れん坊の中学生。迷亭が金魚魅ならあれ(苦沙弥)は藁で括った蒟蒻だね。 (八)

心臓が肋骨の下でステテコを踊り出す。 (八)

「ステテコ」はステテコ踊り。心臓の鼓動が激しくなること。

以上のほか、『猫』には、漱石の論理愛好癖、擬声語・擬態語愛好、江戸語(江戸訛)への愛着、幼児語への興味などが見られ、『猫』の表現を多彩なものとしている。その考察は後日に譲らざるをえない。

The expression and rhetoric of Natsume Sōseki's
Wagahai wa neko de aru (I am a Cat).

NISHIDA Naotoshi

Abstract : Natsume Sōseki is the greatest and most popular novelist of modern Japan. He published his first novel *Wagahai wa neko de aru* in 1905.

Sōseki described this work as a humorous novel. In this paper, I have tried to analyse his humor and rhetoric. To this end, I have pointed out his new and original compounds, such as *kakisensei* (oyster-teacher), *gokurakushugi* (paradise-ism) and so on. These compounds cause us amusement.

Sōseki uses the style of ordinary conversation and strings many words together, as in the following example : “*shafu, batei, buraikan, gorotsuki-shosei, hiyatoi-babaa, samba, yōba, anma, tonma ni itaru made*” (“from start to finish a rickshaw-man, stableman, rogue, hooligan-scholar, old charwoman, midwife, witch, massagist, ass”). This pattern of expression is typical of his writing.

Sōseki displays striking originality in his similes and metaphors.